

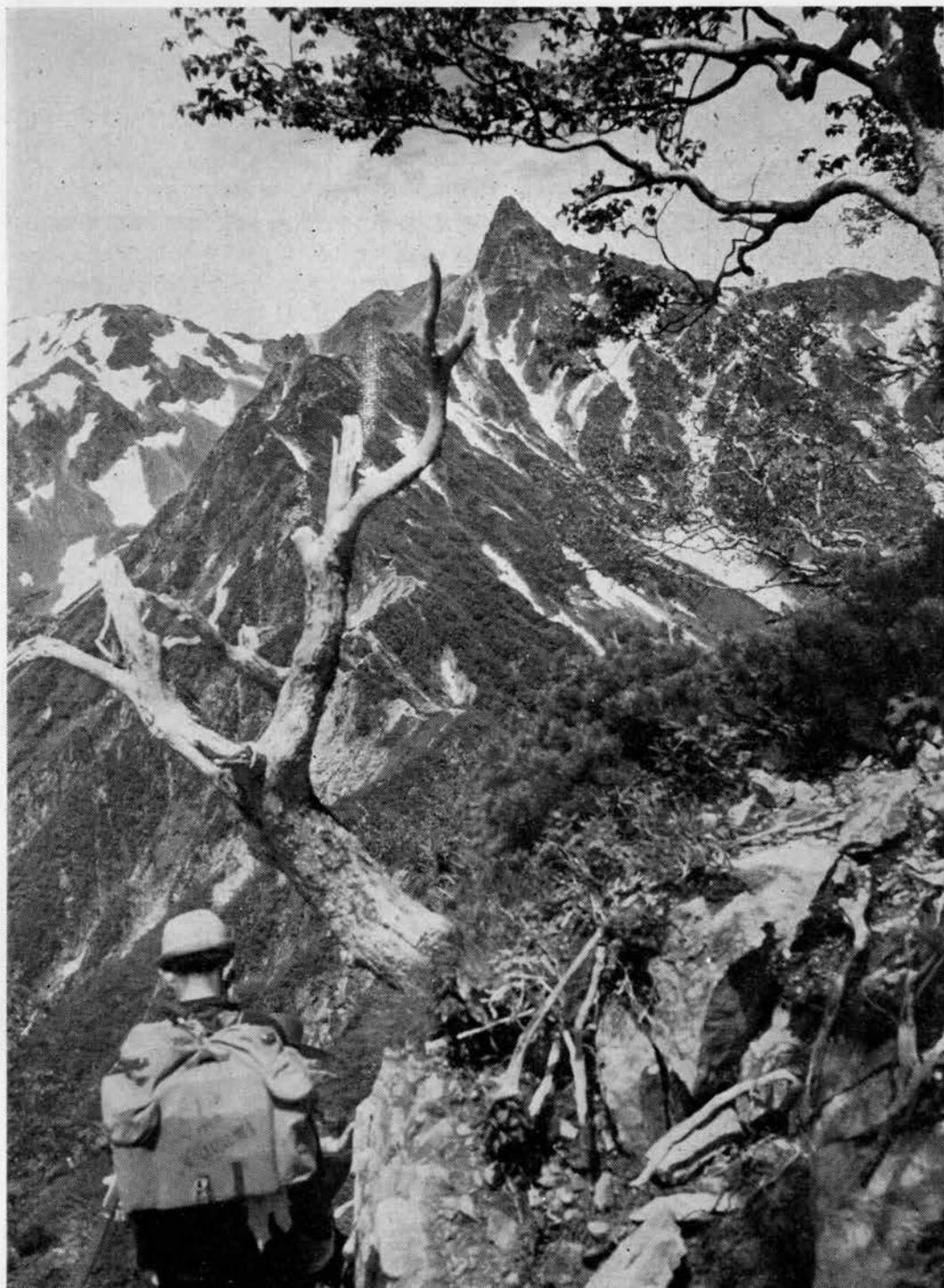
毎月1回25日発行

第3種郵便物認可(昭和35年7月26日) ①

山と博物館

第 7 卷 第 7 号

1962年7月25日



西岳コルより槍ガ岳

撮影 高橋秀男

コマクサとコマクサ属

平 林 国 男

ケシとコマクサ

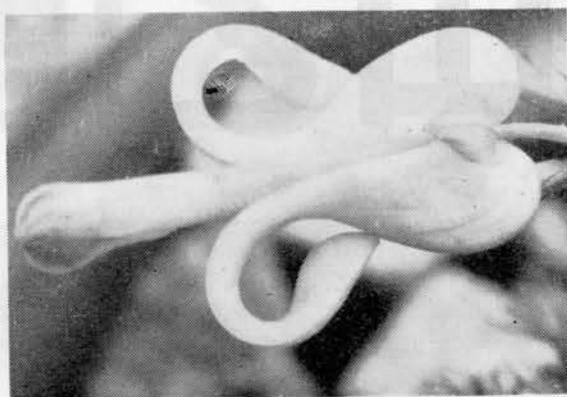
コマクサは植物分類学の上ではケシ科に入れられている植物である。ケシ科の中ではコマクサ属 (*Dicentra*) として、彼等のなかま全部が一つのグループにまとめられている。

ケシ科に入れられるだけのことがあり、根、茎、葉など全草にジセントリン (*Dicentrine*) プロトピン (*Protopine*) などのアルカロイドやその他若干の物質を成分としてもっている。ジセントリンなどは麻酔性をもっているアルカロイドであり、古くから霊薬としてコマクサの薬草的価値を民間に認めさせてきた立役者としての有効成分である。

コマクサの種子は俗にいうケシ粒の如く細かいものであり、長さ1.5mm前後の幾分平べったい腎臓形の種子である重量は0.1mgであり、吹けば飛んでしまう微粒である。

種子から発芽する子葉はたった1枚のへら状の小さな葉からできている。8月頃高山へ登山してコマ草生育地をたんねんに調べると、砂礫の間からひよるひよる伸びた子葉を観察することができる。子葉は長さ16mm幅3mmで発芽したばかりの時期には、種子の皮を黒い帽子のようにちよこつとのせている。子葉は前年の夏、開花結実した種子が発芽したものである。結実後地面にばらまかれた種子は、微粒と軽量にものをいわせて直ちに砂礫の間にもぐり込み、そのまま越冬して1年ぶりに発芽したわけである。

ケシ科植物などが包含されている被子植物は単子葉植物と双子葉植物にわけられている。簡単にいって単子葉植物は子葉が1枚、双子葉植物は子葉が2枚といわれている。子葉の数だけであるとコマクサは単子葉植物に入



コマクサ

ってしまいそうであるが、実際には双子葉植物の部類に含まれる植物である。

コマクサのなかま

コマクサ属の学名 *Dicentra* は花の形からつけられた名前である。disとCentronが一緒になって*Dicentra*に合成されたものであるが、disは数字の2を意味しCentronは花の管状の突起を意味している。であるから花弁2枚が突出して距になっているといった花の形の特徴が属名で表現されている。

コマクサ属には全世界で10数種類の植物が見られる。この種類はいずれも北米とアジアの地域に分布しているだけであり、ヨーロッパには見られない。世界に分布しているコマクサ属の主だった種類を地域別に拾ってみると次のようである。

1. 北アメリカ地域
 - D. cucullaria*
 - D. eximia*
 - D. formosa*
 - D. uniflora*
 - D. pauciflora*
 - D. chrysantha*
 - D. lachenaliaeflora*
 - D. glauca*
 - D. oregana*
 - D. ochroleuca*
2. ヒマラヤ地域
 - D. scandens*
 - D. torulosa*
 - D. Roylei*
 - D. thalictrifolia*

3. シベリヤ、中国、日本地域



種子から発芽したコマクサの子葉

*D. peregrina**D. spectabilis*

日本に分布しているコマクサ属はたった1種類*D. peregrina* (コマクサ) だけである。もっとも観賞用として栽培されている中国原産の *D. spectabilis* (ケマンソウ) を入れると2種類ということになる。しかし、この種は園芸品として移入され人為的に栽培されている植物であって純粋の日本産ではない。

純日本産のコマクサは高山植物として人跡まれな高山帯に生育していたのであるから、まさに高嶺の花として人の生活とは縁のない存在であったと思われる。

コマクサ属の花と莖

コマクサ属は地中に塊茎をもっている無毛の多年性草本植物であり、細かに分裂して切れ込みが多い葉をもっている。地面から直接伸ばし出した花莖の先端に総状花をつけるのであるが、花のつけ方に特徴があつて大きく2つのグループに分けられる。その1つは花莖には花をつけるだけで、葉は1枚もつけない種類であり、他の1つは葉のついてる莖端に総状花をつける種類である。

前者に入る種類ではコマクサ (*D. peregrina*)・*D. cucullaria*・*D. canadensis*・*D. formosa*・*D. eximia* などがあつて、後者ではケマンソウ (*D. spectabilis*)・

*D. chrysantha*などが見られる。

花の色は非常に変化が多く多様であるが、大まかに類別して紅色の種類、黄色の種類、白色の種類の3つに分けられる。

紅色の種類にはケマンソウ (*D. spectabilis*)・コマクサ (*D. peregrina*)のほか *D. canadensis*・*D. eximia*・*D. formosa*・*D. oregana* などがあつて、黄色の種類には *D. tornosa*・*D. scanbens*・*D. chrysantha*・*D. ochroleuca* などがあげられる。白色の種類としては *D. cucullaria*・*D. canadensis* などが代表的な種類である

ところで、色彩の濃淡はさまざまであり、同一種内にあつてもその変化は多様である。特に赤、黄などの色をもっている種類では、数ある花の中に時として全く色をもたない白い花をつける種類を生ずる。この白花のものはそれぞれ変種として名前がつけられている。すなわちコマクサの白花のものにシロバナコマクサ (*D. peregrina* var. *alba*) ケマンソウの白花にはシロバナケマンソウ (*D. spectabilis* var. *alba*) などと名前がつけられている。

コマクサ属の園芸

日本の園芸植物として坪庭や花壇などでよく知られているケマンソウ (*D. spectabilis*) は、コマクサ属の中でも最も古くから世界の人々に園芸品として知られていた種類であると思われる。ケマンソウは日本では別の名をタイツリソウ、フジボタンなどとも呼ばれ、コマクサ属の中でも目立って大きい草丈や花をもっている。このように目立ち易い優美な姿をもっているこの種は、栽培法も比較的やさしく園芸植物として古くから売り出していた。

SIR WILLIAM JACKSON HOOKER の *BOTANICAL MAGAZINE* (1849) によるとケマンソウは北支那などで昔から知られていた園芸植物で、北京などの人々は非常にプライドをもってこの植物を彼等の庭園に栽培していると述べている。

FRED J. の *DICTIONARY OF GARDENING* その他の園芸書においても、いずれもケマンソウの栽培法については非常に詳細に記述され、繁殖法などについても記述が見えている。このことからケマンソウがコマクサ属の園芸上の代表選手として価値高かったことが知られる。

栽培法は種類によって非常に異なるものであり、同じコマクサ属といつてもそれぞれの種類ごとに方法が変えられる。しかし、ここではコマクサ属植物の栽培上で共通した問題を拾い上げてみると、日当たりのよい場所が栽培上での必要条件となるようである。土壌は排水の良好な砂質ローム土がいろいろの種類に応用でき、一般的に肥沃な軽い土地が好まれている。 (山博学芸員)



北アメリカ産の *D. Cucullaria*

高山植物雑記

高橋秀男



カライトソウ

踏まれて絶える

労少なくして、高きに達し、しかも美しき大自然に接することができる、その山は最も大衆的な魅力を持つことになり、利用者はますます増加してくる。

現在ケーブルが架設され、著しく姿を変えた八方尾根を眺めてみよう。山岳スキーの八方、これが八方尾根のネームバリューであった。夏道は沢筋にあって、飛び石伝いに登ったものであるが、こんどは大資本の進出によって、婦女子でも容易に2000mの雲上を楽しむことができるようになった。利用者が増加すること、それは一面喜ばしいことであるが、また一方放置しておくとうるべき事態となる。

八方尾根についている登山路は、昔は八方池までケルンからケルンへと一本の小道を辿って登ったものであるしかし、こんどは尾根にはいたるところ踏み跡があり、道が幾筋にも走っている。その結果一面のお花畑は荒れ放題、醜い道と化し、ここ数年のうち一部は裸山に変わろうとしているのである。

冬は冬でスキーヤーの増加に比例するかの如く、夏山にたくさんの置土産をして、空缶など色とりどりの塵屑で、お花畑に思わぬ色を添えている。

銀座を歩くような格好で登ることができるようになる

と、自ずと公德心をわきまね者も現われる。八方山荘の前には高山植物を抜いてきた不心得者から取り上げて造られたお花畑があった。

また黒菱付近はスキー場の敷狩りのために多くの高山植物の群落に大鎌が振り下された。高山植物一本を折るのも、これは当然罰せなければならないが、一方この地を開発したものも、目先の利潤ばかりに走らずに、人の波によって大きく洗い流され、減少していこうとする高山植物の保護について、早急に前後策を打ち立てるべきではないだろうか。

鉄柵をほどこし、立入禁止区域を設け、監視員を配置することも保護の一つであるが、これはどうも不愉快である。登山者の中には自然に心をとめようとする人も多くいる筈である。このような欲求を持つ人たちこそ、自然の教材を充分に与えてやり、じかに植物にふれながら観察できるくらいの施設を持ちたいものである。そして大いに自然保護の認識を高めてもらいたいと願うのである。そこで保護に相反する利用が問題になってくるが、また同時に表裏一体のものであると考えるとき、始めて自然保護の思想がゆきとどくのではないかと思われる。

高山植物の種類とお花畑

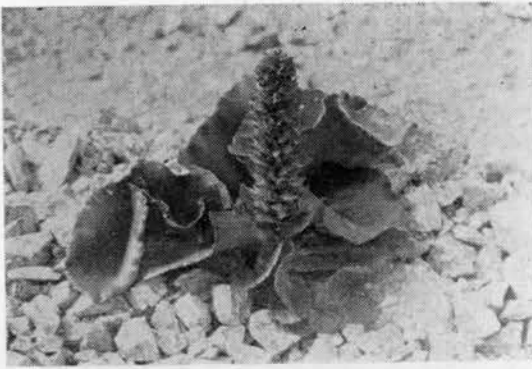
日本の高山植物は変種や品種までを含めるとおよそ800種を数えるといわれる。わが国屈指の高山植物の宝庫として知られる白馬岳周辺一帯からは約300種が生育しているといわれる、大正11年天然記念物に指定されている。特産種ヒナゴメグサ、シロウマリンドウ、シロウマタンポポなど十数種があり、白馬岳で発見されタイプになっている樹本もかなり少なくなる。

その他県内では針ノ木岳、八方山、鹿島槍ヶ岳、烏帽子岳、三ツ俣蓮華岳、燕岳、穂高岳、乗鞍岳、浅間山、御岳、八ヶ岳、仙丈岳、荒川岳一帯、木曾駒ヶ岳、戸隠山など、よくお花畑が発達しており、珍稀種をみることができる。博物館で針ノ木・蓮華岳一帯を調査の結果、約200種を記録した。

高山植物をおぼえる

この岩壁を、この尾根を、この沢を登るんだという登山行為も一つの方法として否定しませんが、ゆとりのある日程を組んで自然に心をとめるくらい、身のある登山をしたいものである。

登山者は高山植物をみると、「ミヤマ…、タカネ…、シラネ…、云々」という形容詞をつけては笑い話の種にし、その終りが「ミヤマシラネソウ」ということになる確かにミヤマ、シラネ、タカネ、クモマなどというのが頭についているものが多い。これは生育地に由来してつけられたもので「深山」「高嶺」「雲間」「岩」「山」



ウルップソウ

「峯」などがあり、またタイプ標本となった山岳名、地名を冠した植物も多くある。後者については「山と博物館第5巻第3号～第8号寺島虎男と山岳名を冠した植物」に詳しいので省略させていたゞく。

前者の生育地に由来して命名された植物については山麓の植物を知っていると割合、簡単に覚えることができる。一例を上げてみると、オトコヨモギーミヤマオトコヨモギ、コウゾリナータカネコウゾリナ、コウリンカータカネコウリンカ、アキノキリンソウーミヤマアキノキリンソウ、ツリガネニンジンータカネツリガネニンジンマツムシソウータカネマツムシソウ、コゴメグサーミヤマコゴメグサ、ウツボグサータテヤマウツボグサ、リンドウーオヤマリンドウ、ホツツジーミヤマホツツジ、ダイコンソウーミヤマダイコンソウ、ダイモンジソウーミヤマダイモンジソウ、オダマキーミヤマオダマキ、シラカンバーダケカンバ、ハンノキーミヤマハンノキ、タネツケバナーミヤマタネツケバナなど、

高山植物の中には特徴があつて、しかも類似種がないので、図鑑を調べただけで簡単におぼえられるものがある。

代表的なものを上げてみると、タカネヤハズハハコ（葉が厚く紅味をおびた白花をつける）、ウサギギク、ミヤマアズマギク、ムシトリスミレ（紫花で食虫植物）、ハクサンオオバコ（葉がオオバコに似る）、ミヤマムラサキ（紫色、ガレ地）、イワイチョウ（多肉葉で葉が丸い。白色）、ユキワリソウ（早春紅色の花をつける）、イワウメ（花がウメに似る）、コメバツガザクラ（葉が三個輪生）、ウラシマツツジ（葉裏に稿がある。紅葉が美しい）、シラタマノキ（全体サロメチールのような臭がある）、キバナジャクナゲ、ゴゼンタチバナ（6～8葉輪生状にみえ、白花）ハクサンフウロ（ゲンノショウコのような花で紫紅色）、オヤマノエンドウ（エンドウノ花に似る）、チョウノスケソウ（氷河の適存植物といわれ花は白色で大きい）、ミヤマキンバイ、ウラジロキンバイミネザクラ、カライトソウ（ワレモコウと同じなかま）コマクサ、オサバグサ（退化した植物で一見シダ類のよ

うな感じをうける）、ハクサンイチゲ、ミヤマオダマキ（オダマキの原種といわれる）、ミヤマキンボウゲ、シナノキンバイ（黄色花で大きい）、ジンヨウスイバ（葉が腎臓形のスイバ）、クロユリ、シロウマアサツキ、キヌガサソウ、クルマユリ（葉が車状につく）、チシマアマナなど、

次に高山植物の類似種をもっとも簡単に見分ける一つのヒントになりそうな点を記してみる。

ヒメシヤジンのガクにはこまかい鋸歯があり、ミヤマシヤジンにはない。

チシマギキョウは花冠の内側に白毛があり、イワギキョウにはない。

ヒメコゴメグサに似ているが、ガクがそりかえっている。ヒナコゴメグサは白馬岳に分布している。

ミヤマシオガマは大きな根出葉があり、花が少ない。タカネシオガマは背丈10センチメートルくらい、四葉が輪生し、白毛がある。ヨツバシオガマは概して大きく四葉輪生。セリバシオガマは分布が限られ、御岳、駒ガ岳八ガ岳、などに見られ、セリの葉に似ている。エゾシオガマは黄白色の花で、葉が直生している。

トウヤクリンドウは黄緑色の花、タテヤマリンドウは茎につく葉が小さくて少ない（湿地）ミヤマリンドウは多数の葉をつけ湿気が多い草だ。

アオノツガラは黄色の花。ツガザクラとコツガクラは前者が壺状の鐘形、後者の壺形の花で、白馬岳、針ノ木岳などに見られる。

クロマメノキは若い枝が丸く、クロウスゴには稜角がある。

コバノイチャクソウの葉は楕円形、コイチャクソウは葉が卵形で葉の先がとがり、輪状に段をなしている。

キバナノコマノツメは草地、タカネスミレは裸地。

イワオトギリはすかしてみると黒点があり、シナノオトギリは黒点のほかにも明点がある。

イワオオギはエンドウのように莢にくびれがあり、シロウマオオギの莢はくびれず、黒色の毛がある。タイツリオオギは滑らかでふくらみ、タイに似た莢である。

ウラジロナナカマドは葉の上半部だけに鋸歯があり、オオタカネナナカマドは葉の縁辺全体に重鋸歯があり、表面につやがある。タカネナナカマドはオオタカネナナカマドに比べ、小葉の対が少なく全体に小さい。

ホソバミミナグサはミヤマミミナグサに比べ、花茎が高く、茎につく葉も長く、巾も広い。

ミヤマツメクサはタカネツメクサより葉の巾が広く厚い。しかも草丈が低いので区別できる。ホソバツメクサ（コバノツメクサ）は葉が非常に細く密である。

オンタデはウラジロタデに比べ、全体に毛が少なく、葉裏緑色である。

実のないのときはアカモノとシラタマノキを間違える人があるが、前者は全体に長立毛があり、後者はない。

以上、主要なもののみをあげ、しかも簡単な識別を試みたものであるから、実際には高山植物図鑑をルックの片隅におともをさせ、充分観察していただきたい。

高嶺のシダ植物

はなやかな高山植物の陰に、これまた高山の景観に欠くことのできない地味なシダ植物がある。なかでも群落をなしているミヤマメシダ、オオバショリマ、カラクサイノデ、シラネワラビなどはよ目立つ群落である。そのほかヒカゲノカズラのなかまも多く、タカネヒカゲノカズラ、ミヤマヒカゲノカズラ、ヒメスギラン、コスギラン、コケスギラン、タカネスギカズラなど一般的であるヒメハナワラビやミヤマヒメワラビはよほど注意しないと発見できない珍品である。

南アルプス北岳は高山性のシダが豊富で、昨年の調査ではオオバショリマ、カラフトメンマ、トガクシデンド、タカネシダ、アオチャセンシダ、イワウサギシダ、ヤツガタケシノブ、キタダケデンド、ヒモカズラなどが見られたが、稀品ヒラギデンド(クモイカグマともいわれ



タイツリオオギ

(本州唯一の産地) はついに発見できなかった。

お花畑を色どる高山植物を多方面から見ることによって、高山のきびしい自然の中に生きぬいてきた姿を知りより一層愛着が増すだろう。

自然科学への入門は自然界の単語をおぼえることに始まる。草木、鳥、獣、虫などと簡単にかたづけずに、できるだけ観察の目を向けてもらいたい。

(山博学芸員)

登山ブームに思う

福島融

上高地は河童橋のたもとに、我々は子孫のためにもこの優れた美しい自然環境をそのまゝの姿で次代に伝える義務がある、という意味の立札が厚生省の手で建てられています。

失礼な言い方で恐縮ですがお役人のセンスにしては仲々の出来栄だと感じました。近年急激に増加した登山者のためにどうしても自然環境が損なわれ勝なので管理者である立場の人達は色々と頭を悩まし、その対策に腐心しているようですが例の立札も彼等に対する警告やら啓蒙の一環として建てられたものでしょう。たしかに最近の登山ブーム、観光ブームといわれる一連の社会現象はすさまじいばかりの発展ぶり、現にこの夏山シーズンは北アルプスの3000米稜線まで登山者で一杯と言った盛況です。その結果として当然のように山の自然は至るところで破壊され、登山路は紙屑や空カンそれにポリ袋で埋り、山小屋や休けい場所の周囲はゴミで汚され異臭を放ってクロバエが群がっています。又清冽な筈の谷川からは大腸菌が多量に検出され、お花畑に咲く高山植物の可憐な花々は心ない登山者の群に無惨にも摘取られ、静寂なるべき山頂に無神経な携帯ラジオがジャズの騒音を流すなど、本当に静かな山を楽しもうと登山して

来た筈なのに全くそれと矛盾した行動が平気で行なわれているのです。何うしてこの山頂にまで、街の塵々を持ち上げねばならないのか理解に苦しみます。こんな風では最早現在の管理態勢が不適當で実質的にはお手あげの状態に近いのではないかとさえ考えてみたくになります。しかしここで私は、昔の山はよかった、などと徒らに過ぎ去った山旅の感傷に浸るつもりはさらさらありません。より多くの人達がこの素晴らしい山の醍醐味を味わえるような傾向、いわゆる登山の大衆化には大いに賛意を表すものです。只それがためにその客体である山、我々の子孫にそのまゝで残してやらねばならない山を我々の世代に破壊されてしまつてはと恐れるのです。

では一体この心配の原因は何処にあるのでしょうか？ 登山人口が急増したからさ々と簡単に片付けるのはあまりにも無責任すぎます。そこで私なりに究明してみようと思います。先ず第一には山岳会とか山岳部のような組織された登山団体に参加していない人達、言い換えれば、ズブの素人々があまりにも多く増えすぎたことに因ると思われ、彼等は登山の基礎教育をうけずにいわゆる「ブーム」に浮かされて一定の段階を踏まずに一足とびに稜線へ飛び上つて来た格好で全くの鳥合の衆と化

しており、前述のような行為に殆んど自責の念を持ち合せておりません。そして最悪の場合はアクシデントを起して周囲に一層の迷惑をかけるのです。ですから既に組織を持っている人達は出来る丈彼等を団体に吸収するか又は何等かの方法によって登山する以前に、登山のオーソドックスを啓蒙し積極的に指導すべきでしょう。それには日本山岳会や日本山岳連盟がそのような方向に働きかけていると聞きますが未だ具体的には程遠いようです。次に前にも少しふれましたが山を管轄しているお役所の管理面の不備が目立ちすぎることです。省直属のレンジャー(国立公園管理人)上高地と立山に二人宛しかおらず殆んど他地域までは手がとまぬ現状です。そこでその穴埋として私達のような民間人に臨時指導員を委嘱しているのですがこれもあまり効果が上がっていないようです。(私の知る範囲では)又、白馬、乗鞍等に夏季常駐している営林署の監視員は確かに忠実に岡引きよろしく、お花畑の花盗人を検挙するのに余念がないようですがそのみに終始して、頂上から谷への投石とか山小屋が排出するゴミ山の処理の指導などまでには手が廻り兼ねており、これは彼等の管轄外で無理からぬことでし

ょうが何分片手落ちな現状と思われま

。今後は全般的に登山者への注意をうながし指導するようより良い指導員の増員こそ当面の急務と言えま

しょう。最後に観光開発という美名のもとに強引に押し進められる合法的な破壊でしょう。これは私共の到底手のとまぬ大問題で政治的な場で決定されることでしょうが、少なくとも一部大資本家の資本追求の道具にだけは絶対にしたくありません。最近も上信越国立公園のある温泉へ行って来ましたが以前はひなびた山宿のあった静かなこの辺りも、ブルトラーがうなりダンプカーが走り廻って騒音をまき散らし、けばけばした色彩のホテルが建ち並び山頂まで設けられたケーブルはユカタ掛けの客を運び上げ彼等が下駄ばきで山頂をのし歩いている風景には思わず目をおぼわすにはいらませんでした。この傾向は箱根国立公園と全く同様で北アと云えどもその外ではありませんから十分に監視する必要があります。以上の三点について述べましたが要は自然を愛するという思想を啓蒙し徹底させる様努力するにつきますと思

(山博学芸員・北福島商店)

コムクドリ

長沢修介

6月はヒナ鳥の季節、何処へ行っても黄色い嘴の者で一っぱい。このコムクドリも先程から見ていると親鳥が一生懸命に餌を運んで来る。今日は森林帯を歩くのだからと500ミリの望遠レンズを持って来なかったのが今になって悔れる。仕方なし巣から10メートル程はなれた所にある藪の中に身を潜めカメラに135ミリの望遠レンズを付けて待つことにする。5分から10分の間を置いて1回雌雄共々やって来る。まず雌親が巣穴の横の木の枝に

一度止りおもむろに巣穴に近すぎ1m位迄近寄ってぱつと巣に入る。巣穴の入口に止ってからは廻りを見たりしてはいない。素早く巣に入ってしま

う。巣穴の入口に親鳥が止ると中からチーチーと一っせいに餌をせがむヒナの鳴き声がる。あの声量ではもう相当大きいヒナだ。巣立ちも間近なものであろうと想像する。雌親は一度巣に入りエサを与へてから一旦巣穴迄戻って顔だけ出して外を伺い又巣の中に入って今度は白い塊をくわえて出てき、入る時と違って巣穴から直接ぱつと飛び立って何処かへ行ってしまった。雄は雌の巣にいる間、巣穴から2m位はなれた木の枝でじっと辺りを警戒しており、雌が出ると入れ代りにずっと巣に入りすぐ出てしま

う。出る時に白い塊はくわえて来なかった雌のくわえて出たものはヒナの糞である。彼等とて棲家の清潔には心を配っているのだ。もう間もなく巣立ちして一家そろった姿が見られるだろうとそれを祈りつつそつと巣のそばを離れた。



フンを運び出すコムクドリ



博物館だより

7月1日 館庭で大町みずえ会の写生会行なわる 参加者300名

7月2日 長野市市民会館において高山植物保護対策協議会が開かれ出席

7月5日 カモシカの放養舎 外柵工事入札中旬より施工 月末完工の予定

7月13日, 14, 15日 大町高校全校登山に指導者派遣

7月20, 21, 22日登山教室(鹿島槍)が行なわれる

7月23, ~27日 恒例の山自然科学教室第6回は中学生200名が参加 八方尾根において行われる

7月28, 29日大町市民登山(扇沢~鹿島槍)が行われる

7月29日~8月7日 東京白木屋において開催されるアルプス動物展に出品

8月1~2日 県文化歳保稜委視察 居呑里, 高瀬川, 龍川, 扇状, 薦

8日7~9日 科博主催の高山植物観察会(本曾駒ヶ岳)に参加

資料寄贈

四つばし61-8 大阪市立電気科学館, 峠No2, 4 広島山稜会, 独標No78, 79, 85 独標登高会, 大阪市立自然科学博物館研究報告No13, 14 大阪自然科学博, 教育長野 長野県教育委員会, 山毛榉林 No62 広島山の会, 登攀No259 東京緑山岳会, 岳友No63 岳友クラブ, 京都山岳61-9 京都山岳会, 金沢文庫研究No70 金沢文庫, 山と溪谷No271 山と溪谷社, 国立公園No142 国立公園協会, モンキーNo44 日本モンキーセンター, 地質ニュース地質調査所, 明峯山岳会No67-8, 明峯山岳会, 山嶺No376, 377 東京野歩路会, Omcレポート 奥多摩山岳会, 山No350, 351 横浜山岳会, 樺火No295, 296 山小屋クラブ, わらじNo48 わらじの仲間, 自然科学と博物館 国立科学博物館, Nature Stude 大阪市立自然科学博, 九重山 立石敏雄, 教育長野 長野県教育委員会, 自然保護No6 日本自然保護協会, 登攀No255 東京緑山岳会,

(敬称略)

10年前山岳博物館が設立され、しばらくは山岳博物館といいながら、その内容はお粗末で山岳関係の資料不足はもちろんのこと、大町を基点とした北アルプスへの登山者が立寄っても満足な説明すらもできなかったものである。

山岳人達のあいだでは自然科学博物館と名称を改めたほうが適当じゃあないかなどと悪口とも皮肉ともつかないことをよく言われたものである。

ところが現在はどうかであろう。職員を中心とした周囲のたゆまぬ努力はついに日本の山岳博物館に育てあげ、当時皮肉を言った中央の人達が貴重な資料をどンドン寄贈して来るようになった。皇太子や高松宮様が来館して山岳博物館を再認識したというようなことでは地元として誠に残念である。

博物館を育てた、職員を含む山岳人のなかには全日本山岳連盟公認指導員が6人もおり来館者はもとより、広く一般にも楽しく安全な正しい登山の指導に心がけ、遭難対策協議会等は積極的に参加し、長野県山岳連盟結成にあたり努力したり、山岳遭難事故防止に大きな役わりを果している。

近來自然の野山にくり出す人達が非常に多くなったのは、こくよるこばしいことであるが残念なことに自然保護についての一般の認識はきわめてうすく、このまゝだと、世界に誇る景勝地や学術上貴重な高山動植物等も近い将来壊滅の憂目を見るようなことにもなりかねない。

自然環境の複雑な関係を見きわめもつともよい方向へ努力するのが自然保護の仕事である。

博物館が手がけている雷鳥の調査、コマクサの研究、小鳥の声を聞く会、植物採集の会等みな自然保護につながる運動である。このような地味な仕事を気長に辛抱強くつゞけていることで、日本の自然保護も、大町山岳博物館から波紋と

ものである。

私は思う

(武田 武)

お願い 本紙の購読ご希望の方は1カ年購読料300円(郵送料とも)を現金書留または郵便為替、郵便切手で長野県大町市、大町山岳博物館あてご送金下さい。 大町山岳博物館

山と博物館 第7巻第7号 1962年7月25日発行 発行所 長野県大町市TEL(大町)211 大町山岳博物館 印刷所 大町市上仲町 信州印刷大町工場